



## 農業系高校後継者特別推薦入試 を実施しました

令和2年度入学農業系高校後継者特別推薦入学試験を9月30日(月)に実施し、10月8日(火)に合格発表しました。

合格者は6名で、内訳は露地野菜専攻が4名、施設野菜専攻と鉢物・緑花木専攻が各1名でした。

この入学試験は、県内の農業系高校に在籍し、かつ県内に居住している自立経営可能な条件を備えた農業経営体の後継者で、農業大学校卒業後は、農業に従事し、地域の基幹的な農業者として活躍しようとする意欲の強い人を対象とした推薦入学試験で、本年度で3年目を迎えます。

受験者は、いずれも地域の農業を支える基幹的な農業者の子弟ばかりで、面接試験では、農業大学校で勉強したいことや身に付けたいこと、卒業後の就農計画など、皆が10年、20年後の自分の将来像をしっかりと述べていました。

今回合格した6名が、農業大学校のそれぞれの専攻で活躍し、卒業後は産地を牽引する農業者に育ってくれることを期待します。

なお、11月1日(金)に一般推薦入試を実施するとともに、12月10日(火)に一般入学試験を実施する予定です。

(学務科 鈴木 聡)

## 農業系高校との意見交換会 を開催しました

県内10校の農業系高校の農場長及び農業教育共同実習所の主査との意見交換会を、10月2日(水)に、農業大学校を会場に実施

しました。

冒頭に、高等学校農業教育研究会長である安城農林高等学校の鶴飼校長から、「組織やシステムに違いはあるが、農業の後継者を育成するという目標は同じである。農業系高校と大学校の5年で育てるという視点を持ち、連携を図っていく必要がある。」とのあいさつをいただきました。続いて友松農業大学校長があいさつし、「入学生の6割が農業系高校の卒業であり、3年間プラス2年間で発展的な教育をしていきたい。そのためにも、普段から情報共有をし、連携を一層密にしていきたい。」と述べました。

その後、農業大学校から、学校概要、専攻紹介、夏休みに実施した緑の学園研修やオープンキャンパス等の状況報告を行いました。一方、農業系高校側からは、職業学科の学級数の推移、農業科の進学業況や就職状況、時代の進展に応じた農業教育の取組、地域社会との連携等、県の農業教育の現状について説明していただきました。

今回は意見交換のテーマとしてスマート農業の取組を設定し、各校から発表を行いました。農業系高校では、すでに植物工場を導入してリーフレタスの生産体系の確立から販売を学んだり、無人航空機(ドローン)の操作体験や飛行原理の学習、水田水位データの整理・集約を行いプロジェクト学習としている学校もありました。次年度スマート温室\*を建設し、イチゴ



[開会の挨拶をされる鶴飼校長]

の栽培に取り組む学校もありました。

その後の意見交換では、農業系高校と農業大学の連携を深める方策や教育機関としてのスマート農業への取組とその課題等についての意見や質問が出されました。

閉会後は、和耕寮の食堂で昼食をとっていただき、農高を卒業した教え子と再会し、話を弾ませる先生もいました。

(学務課 鈴木 聡)

\*温室内外の環境データをモニタリングして、温室内の環境を常に最適に保つよう自動制御するシステムを備えた温室

## 専攻紹介 【露地野菜専攻】

露地野菜専攻は、1年生16名、2年生12名の合計26名（うち女子5名）が在籍しています。実習ほ場として、総面積約1.5haの露地畑（一区画が10～25a）の他に、イチゴの栽培ハウス及び育苗で使用する簡易ハウスが2棟あります。実習では、トラクター、収穫台車等の農業機械を使用することも多くあります。



[乗用型の農業機械を使った消毒作業]

本専攻では、学生が2年間にできるだけ多くの品目の栽培技術を習得してもらうため、県内で生産されている40品目以上の野菜を栽培しています。主な栽培品目は、キャベツ、ハクサイ、ブロッコリー、レタス、ダイコン、ニンジン、バレイショ、タマネギ、スイートコーンナス、キュウリ、ピーマン、スイカ、カボチャ、アスパラガ

ス、エンドウです。また、イチゴも露地野菜専攻で栽培しており、475㎡のハウスで養液栽培システムを用いて12～6月まで収穫しています。

実習では多品目を栽培するため、2年生が主体となり1年生と協力して、ほ場整備から定植、栽培管理、収穫調製、片付けまで一連の作業管理を行っています。中には非農家出身で野菜栽培が初めてという1年生もいますが、2年生と一緒に作業をすることで、徐々に農作業や農業機械の操作方法を習得していきます。

収穫物は、近隣の市場や、毎週水曜日に校内で販売しています。特に、校内販売では、自分で育てた野菜を消費者に直売することで、消費者の生の声を聞くことができ、農業の楽しさを実体験しています。

本専攻では、野菜の先進技術を勉強するため、県外先進地研修を年1回、県内の優良農家視察研修を年3回計画しています。今年は、滋賀県のタキイ種苗と、東三河地域の露地野菜大規模経営、西三河地域の農機具メーカー等を視察しました。

プロジェクト学習では、学生が勉強したい品目について課題（品種比較、新資材試験、栽植密度、施肥量試験など）を設定し、自分で栽培計画を立て、管理作業から収穫調製作業に至るまで責任を持って行います。2年生は試験結果をまとめ、専攻内で発表し卒業論文として掲載します。

(農学科 安永美沙子)

## 【養豚・養鶏専攻】

畜産課程養豚・養鶏専攻の1年生11名、2年生9名の計20名は皆動物好きで、家畜と触れ合う牧歌的な学習環境の中で楽しく専攻実習に取り組んでいます。

1年生は5月中旬に養豚か養鶏のコースいずれかを選択し、それぞれの家畜の飼育管理方法を学びます。

9月から1年生は派遣実習が始まり、39日間にわたって各農家の農場でスキルを磨

きます。2年生はプロジェクト研究をまとめて卒業論文を作成します。

### ○養豚コース

愛知県は豚肉の大消費地であるとともに、その産出額が全国第9位（平成29年）と、養豚が盛んな地域でもあります。そのため、養豚コースに対する生産現場からの期待は大きく、昨年度の卒業生は全員養豚場に就職し、本年度は養豚農家の後継者が3名入学しました。

養豚コースでは、豚の交配から肉豚出荷に至るまでに必要な技術と知識を学んでいます。昨年度から繁殖母豚として使用するランドレース種と大ヨークシャー種の交雑種の自家生産に着手しましたが、本年度からはこの交雑種と交配して三元肉豚を生産するためのデュロック種の自家育成にも取り組むこととなりました。



〔子豚管理に取り組む学生たち〕

学生は、2年生になると卒業論文のための試験に取り組みます。本年度は、「哺乳子豚への鉄剤投与回数が貧血防止と体重増加に与える影響」や「PCV 2ワクチンの接種中止のための衛生調査」など、自分たちの興味あるテーマに意欲的に取り組んでいます。

臭い・汚い・きついの3K作業と敬遠されがちな養豚ですが、学生たちにとって、かわいい子豚たちの世話をするのは、心癒される時間ともなっています。

### ○養鶏コース

愛知県は鶏卵の産出額が全国第6位（平成29年）であり、養鶏が盛んです。

養鶏コースには、開放鶏舎とウィンドウレス鶏舎のタイプの違う2鶏舎があり、鶏種や飼養形態による飼養管理方法の違いを学習できます。また、愛知県の特産である「卵用名古屋コーチン」を主体に、白色レグホン、ロードアイランドレッド、アローカナ、烏骨鶏を合わせて約2500羽飼養しています。

このような実習環境や職員の配置は他県の農大に比べると充実しており、ここ数年毎年のように県外出身の学生が養鶏コースを目指して入学してきます。今年は例年になく多く、1年生6名中4名が他県出身です。

わざわざ県外から入学するだけに学習意欲が高く、お互いに刺激しあいながら今まで以上に活気ある専攻実習を行っています。日頃から養鶏コースでは、経営者や農場長になれるよう、自ら考え自ら計画し責任を持って行動する人物になることを目指していますが、今の学生はこれに十分応えられると期待しています。

派遣実習を終えプロジェクト学習のテーマを考える時期である今、学生の学習意欲に柔軟に対応し、学生の主体性を伸ばしていきたいと考えています。

（農学科 山本るみ子、渡邊 久子）



〔1年生は先輩のプロジェクト調査の強力な助っ人〕



## 加工実習

### おいしいフルーツジャムが出来ました 農大祭で販売します！！

果樹専攻2年生13人が、10月4日(金)に、農産加工実習として、農大で収穫した果実を使用し、ミカン、洋ナシ、イチジクのジャム作りを体験しました。果肉に砂糖を混ぜながら糖度40度以上になるように煮詰めて仕上げますが、ジャムが焦げ付かないように絶えずかき回すのはかなり大変な作業



[ジャム加工の様子]

でした。今回作ったジャムは12月7日(土)に行われる農大祭で販売します。

今年は各種50ビン程度用意していますが、毎年すぐに売り切れてしまうので、ご購入の際には早めにお並びく

ださい。 学生が丹精こめて造ったジャムを是非、農大祭にてご賞味ください。

(農学科 佐野 達也)

## 校外学習

### 畜産課程2年生、群馬で学ぶ機会を得る

農学科畜産課程の2年生22名(酪農専攻13名、養豚・養鶏専攻9名)が9月5(木)、6日(金)に、群馬県にある、(一社)家畜改良事業団(前橋種雄牛センター及び家畜改良技術研究所)並びに(株)伊香保グリーン牧場へ県外学習に出かけました。

前橋種雄牛センターでは、精液を採取し全国に販売しているトップクラスの種雄牛(ホルスタイン種及び黒毛和種)を眼前に見学することができました。酪農専攻の学生ですら、普段見慣れている雌牛と比べてその迫力にかなり興奮した様子でした。

家畜改良技術研究所では、家畜のみなら

ず動物の遺伝子に関するすべての検査が遺伝子検査部でされていることに驚きと興味をもって講義を受けました。また、食味についての研究では、要素毎の3Dチャートによる分析がされ、肉のおいしさに迫ることについて楽しく学ぶことができました。他には、凍結精液に関する最新の作製機械を見学させてもらい、普段、ストローとして使用している人工授精用の凍結精液の供給について学ぶ良い機会になりました。



[全国トップクラスのホルスタイン種雄牛]

2日目の(株)伊香保グリーン牧場では、昭和45年から観光牧場として開場した成り立ちと、馬、山羊、羊、ウサギ、牧羊犬等の動物を中心に据え、『初心者向けのふれあいを主体とした牧場』に特化している現状について説明がありました。

学生も積極的に、牧場のイベントのタイムスケジュールに基づき、思い思いにふれあい体験等を行いました。

例年、視察先は酪農専攻と養豚・養鶏専攻向けの2か所程度選定しており、当初計画では埼玉種畜牧場を予定していましたが、豚コレラの発生に伴い家畜防疫の観点から視察先を変更し、今回の施設や牧場を視察することになりました。

学生たちも普段扱っている家畜とは違った動物とのふれあい体験の楽しさを感じた一方で、それら体験をナビゲートする側の大変さも理解することができたことと思います。

(農学科 川上 幸裕)

## 農業大学校教育研究会に参加して

全国農業大学校協議会主催の農業大学校教育研究会が、9月25日(水)、26日(木)の2日間、東京都にある国立オリンピック記念青少年総合センターで開催されました。

この研究会は、教育内容の充実・改善・強化に資するために、全国の農大職員が集まり研究討議を行うものです。

今年度は、農業技術の高度化（GAP、スマート農業）と学生の進路の多様化等に対応した指導方法、新たな農業実践教育をテーマに開催されました。

1日目の基調講演では、知多郡阿久比町の有限会社千姓代表取締役の都築氏から、農業法人における人材育成についての講演がありました。この中で、特に印象に残ったことは、作業の様子を動画で撮影して、作業が早いのか遅いのか、新入社員とベテランでは手や体の動かし方がどの様に違うか等を客観的に理解できるように取り組んでいることでした。



[有限会社千姓の都築氏による基調講演の様子]

続く2日目の研究討議では、参加者が5グループに分かれて、各県農大におけるGAPやスマート農業、学生確保の取組などを話し合いました。

このうちスマート農業では、温室などの施設が老朽化してスマート農業に対応できないという意見がほとんどで、古い施設でも簡易に設置できる環境測定装置などで対

応している県もありました。また、自動運転トラクターやドローンなどは自前で整備するのではなく、機械メーカーや大学などの協力を得て進めていくという意見が大勢でした。

今回参加して、学生確保等では本校と同様な取組をしている道府県が多い一方、GAPではGLOBALGAPを取り入れている県があるなど、大変刺激的で参考になりました。  
(農学科 横井 信之)

## 鶴舞公園の花壇用の花苗を提供しました

サクラ、バラ、ハナショウブなどの花の名所として、また緑豊かな憩いの場、スポーツやレクリエーションの場となっている名古屋市昭和区にある鶴舞公園は、1909年に開園し今年で110周年を迎えています。

現在、鶴舞公園の正面北側、噴水塔の円周の北西側と南西側、公園の一番東側に位置する竜が池の南側の花壇に、それぞれ鉢物・緑花木専攻の学生が育てたテルスター（ナデシコの仲間）、クロトウガラシ（観賞用のトウガラシ）、シロタエギク、宿根バーベナの4種類の花壇苗が植えられていますので、お近くにお越しの際はぜひご覧ください。



[花壇のクロトウガラシ(中央)とシロタエギク(周囲)]

なお、昨年度、鉢物・緑花木専攻で公園の顔となるJR鶴舞駅すぐの正面広場の花壇づくりを行ったことを、農大だよりの平



成30年9月号で紹介しました。この正面花壇は現在工事中で、工事が終わった来年3月には、今年も専攻の学生が考えた花壇のデザインをもとに、学生たちが育てた花壇苗を用いた花壇づくりが予定されていますので、楽しみにしてください。

(農学科 坂場 功)

### 指導職員向けのメンター研修を開催

農大では、平成28年3月に「教育研修基本計画2020」を策定し、農業を担う者の育成、農業者生涯教育の充実、県民の食料・農業への理解促進に係る3つの大きな目標を掲げ、その目標実現のための7つの柱と主な取組を計画的に実施しています。

柱のひとつである指導職員の能力向上を図るため、10月8日(火)に農学科職員を対象としたメンター研修を開催しました。

3つの専攻の職員3名が講師として、各専攻での事例を交えて学生指導のポイントを紹介し、意見交換を行いました。



[真剣に聴講する職員たち]

講師から、学生に教えるポイントとして、「行動に先立って目的をしっかりと理解させること」、「信頼関係を築くため、学生を観察して、じっくり話を聞くこと」等学生との接し方が紹介されました。また、「行動分析学を勉強したことで、学生の取る行動のプロセスに合わせてアプローチし、客

観的な判断ができるようになった」という自身のスキルアップの取組の紹介がありました。加えて、学生の主体的な行動を促すため、「学生が責任を持ち、また技術を培うテクニックとして他の学生と自然に見比べられるよう、各自の持ち分を明確にすること」、「自らで学べるよう参考となる具体的な文献を紹介すること」、「日々、記録を取る癖をつけさせ、それを見返すことで改善策が考えられることを会得すること」等の説明がありました。

日頃、担当の指導業務に追われて他の専攻職員との情報交換がしにくい中で、各職員が創意工夫しながら学生と向き合い、効果的な指導方法を考えながら取り組んでいることを知りうる良い機会となりました。

なお、今後は、他の研修に参加した職員を講師とした伝達研修を企画していく予定です。(教育部長 黒田 貴信)

### 農業者生涯教育研修 名古屋コーチン・スマート養鶏の 最新研究成果を学ぶ

名古屋コーチンを主体とした試験研究成果についての研修を、養鶏に関する実用化技術研究会との共催で、9月20日(金)に西三河総合庁舎で開催し、県内各地から48名の参加がありました。

最初に、肉用名古屋コーチンに対するみりん粕(未利用資源)の利用技術の開発について、愛知県農業総合試験場畜産研究部養鶏研究室(以下、養鶏研究室)の大口主任が講演しました。みりん粕は、鶏のし好性が良く保存性に優れ、産肉性等は慣行と同等で、飼料として利用可能であるとの成果が紹介されました。

次に、飼料米を活用した名古屋コーチン鶏肉の差別化技術の開発を、養鶏研究室の宮川主任研究員が報告しました。飼料米を14週間給与すると鶏肉の柔らかさが向上するが肉色が淡くなること、鶏肉の退色改善としてアスタキサンチン(天然色素)の出

荷前2週間給与が有効なことが示唆されました。

さらに、人により異なる鶏卵外観評価等を画像とコンピュータで効率化する技術について、養鶏研究室の赤尾技師から講演がありました。ここでは、従来の主観的評価と機械による測定値の誤差を比較しながら、コンピュータに学習させ評価基準を数値化する技術の課題について学びました。



[成果を発表する研究員]

最後に、愛知県立大学情報科学部情報科学科の神谷幸宏准教授から、ドップラーセンサーを活用した鶏モニタリング技術の開発について講演をいただきました。IoT技術の仕組みについての説明の後、IoT技術を活用することで、鶏の活動量の計測及び圧死の予測及び防止の可能性が示唆され、参加者の関心を呼んでいました。

(就農支援科 石本 聖絵)

## カンキツの病虫害防除対策研修を開催

農業大学校中央教育棟の3階大講義室において、「カンキツにおける病虫害防除対策」をテーマとした生産高度化研修を9月27日(金)に開催し、県内各地のカンキツ生産者を中心に80名の参加がありました。

静岡県農林技術研究所果樹研究センターの土田祐大主任研究員を講師にお招きし、「露地ミカンのサビダニに対する効果的な防除」と題する講演をいただきました。

カンキツにおける主要害虫管理の考え方は、①天敵による防除と、②農薬による防除の2つに大別されます。そして、露地での土着天敵を活用したミカンサビダニの防除は、5～6月は天敵に対して影響の少ない薬剤を散布し、7月以降は通常防除を行うことがポイントとのことでした。また、ミカンサビダニの総合的防除では、発芽により増殖を開始する4月にマシン油、7月と9月に殺ダニ剤を用いると効果的であるとの報告をいただきました。

次に、東三河農林水産事務所農業改良普及課の栗田恭伸主任専門員から、「ハウスミカンにおける天敵を利用したハダニ防除体系」と題する講演をいただきました。

ハウスでは、①天敵によるミカンハダニ防除としてスワルスキーカブリダニを用い、②スワルスキー剤の比較試験は、天敵放飼前の満開時防除でハダニ密度を下げる『ゼロ放飼』の効果が高いとの報告をいただきました。

研修後のアンケートでは、ほぼ全員が参考になったと評価しており、試験研究、現地事例ともに具体的でわかりやすいと好評で、大変有意義な研修となりました。

今後の要望としては、スリップス、アザミウマ、かいよう病等の病虫害対策やコスト削減できる技術への期待の声などが聞かれ、引き続き、生産者への技術向上や経営改善に繋がる研修の必要性を感じました。

(就農支援科 野村 芳江)



[ハダニ防除体系に関して発表する普及指導員]

## 6次産業化の実践に向けて 農産物利活用研修を3回シリーズで開催

農業経営の多角化のため、6次産業化の取組を検討している農業者を対象とした農産物利活用研修会を3回のシリーズとして開催しました。

第1回は7月18日(木)に「これから始める6次産業化(6次産業化の基礎知識)」をテーマにして開催しました。農業者が計画を具体化する際の手がかりとなる6次産業化のプロセスと支援制度について理解を深めるとともに、実際に取り組み実績を上げている茶農家の野場義尊氏から、茶の焼き菓子や手摘み抹茶の販売戦略に関する貴重な経験談を話していただきました。

第2回は8月23日(金)に、「知っておきたい6次産業化関連法規あれこれ」をテーマとして、東海農政局消費・安全部表示・規格課の渥美雅己主任広域監視官と経営・事業支援部地域連携課の松尾晃治六次産業化専門官を講師に迎え開催しました。

知っておくと得する六次産業化の関連法規や事業内容や法改正に伴い変わりつつある食品表示制度を、法律関係の難しい話にも関わらずわかりやすく説明していただき、6次産業化の支援制度等を理解することができました。



〔「これから始める6次産業化(第1回)」での講義〕

第3回は10月25日(金)に、「売れる商品づくり」をテーマに、大手食品メーカーでヒット商品づくりの経験がある東京農業大

学オープンカレッジ講師高橋和良先生を講師に迎え、研修会を開催しました。

加えて、6次産業化の実現に向けた助言を求める希望者には、愛知県6次産業化サポートセンターの6次産業化プランナーとの個別相談会も併行して行いました。

3回にわたり開催した農産物利活用研修の参加者は、それぞれ22名、11名、20名で、研修を通じて比較的少数で推移しました。これは、6次産業化等経営の多角化への取組は、各農業者の経営におけるタイミングが関係するためと考えられました。アンケートの結果、各回とも8割以上の参加者から研修会が参考になったとの評価をいただきました。また、個別相談会では、個々の課題について熱心に相談する様子が見られました。参加者からは、「事業計画、表示制度やマーケティングの具体的な進め方が分かった。」「6次産業化に関する法規は参考になった。」「アイデアの発想法や商品化には時間を掛けて考えることの必要性を学ぶことができた。」などの声が聞かれ、6次産業化に向けての必要な知識の習得ができた研修会となりました。

6次産業化の実践には、幅広い知識が必要となるため、農業大学校では、次年度以降も充実した内容の研修会を計画していきます。(就農支援科 河野真砂子)

## 獣害対策の新技术研修会を開催

農業者生涯教育研修と農業総合試験場(以下、農総試)の実用化技術研究会との共催で、「獣害対策の新技术」を10月10日(木)に豊田市民文化会館で開催し、農林業者、関係者あわせて113名の出席者がありました。

はじめに、農総試環境基盤研究部の上田技師から、獣害対策に関する試験研究成果として、「おりべえシリーズ(愛知式全方位開放型檻付き囲い罠)」の改良状況や「捕獲方法の違いによる肉質の変化」等に関し



での発表がありました。

この後、豊田加茂農林水産事務所の勝専門員から「集落ぐるみの鳥獣被害対策の取組事例」について、また農総試企画普及部の辻井主任専門員から「戦略的なイノシシ捕獲に向けて」についての講義がありました。



[研究、行政及び普及の三組織から情報提供]

被害軽減に役立つイノシシ捕獲のためには、①農地を利用する個体群を確実に仕留める、②繁殖個体を含む群れごとの捕獲を狙う、③誘引効率の高いわなを利用するといった「3箇条」が重要であることが示されました。

さらに、県農業振興課野生イノシシ対策室の小出室長から、獣害対策は防御と捕獲の2本立てで、農業者・猟友会・行政三位一体で取り組んでいくこと大切であることを講義していただきました。

近年、2億から2億4千万円で推移している獣害被害額を減らすために、そして中山間地域を中心にした農業振興に役立てるためにも意義のある研修となりました。

(担い手支援科 福井 敏幸)



## 農大からのお知らせ

### ◇農大祭にお越しください◇

「新農大への Step up ～農産物に感謝を込めてから」をテーマに、農大祭2019を開催します。

今年も、農大生が育てた自慢の農畜産物の直売、加工食品等のバザー、農大キャンパスツアー、農大茶席、協賛団体・企業の出展など、農業大学校を身近に感じて楽しんでいただける催しを計画しております。

学生・職員一同心を込めて準備に取り組んでいます。ぜひ会場まで足をお運びください。

- ・期 日：12月7日(土)
- ・時 間：午前10時から午後2時まで
- ・場 所：農業大学校

詳細については、農大だよりや本校ホームページでお知らせします。

- ・問合せ先：学務科(伊藤)0564-51-1602

### ◇緑の学園（1日農業体験学習）◇

- ・開催日時

第5回 12月24日(火)

午前10時から午後4時30分まで

(雨天実施)

- ・対象：主に高校生（農業を学びたい高校卒業生を含む）

- ・定員：30名

- ・場所：農業大学校

- ・受講申込書を郵送またはファクシミリで研修部まで送付してください。

(締切日：12月1日(日))

- ・詳細は本校ウェブサイトをご覧ください。

- ・問合せ先：就農支援科(野村)

0564-51-1034

## ◇令和2年度入学者選抜試験◇

### 一般推薦入学試験

- ・ 出願期間：令和元年9月30日(月)から  
令和元年10月16日(水)まで
- ・ 試験日：令和元年11月1日(金)
- ・ 合格発表：令和元年11月13日(水)
- ・ 試験科目：小論文(800字以内)  
面接試験
- ・ 募集人員：定員100名のうち2/3以内  
(特別推薦入学者を含む)
- ・ 受験会場：農業大学校

### 一般入学一次試験

- ・ 出願期間：令和元年11月12日(火)から  
令和元年11月27日(水)まで
- ・ 試験日：令和元年12月10日(火)
- ・ 合格発表：令和元年12月19日(木)
- ・ 試験科目：数学I、小論文(800字以内)  
面接試験
- ・ 募集人員：定員100名のうち推薦入学合格者を除く人数
- ・ 受験会場：農業大学校

### 一般入学二次試験

一般入学一次試験で合格者が定員に満たなかった場合に実施します。

### その他

- ・ 特別推薦入学試験、その他入学試験についての詳しい情報は、本校ウェブページをご覧ください。
- ・ 問合せ先：学務課(鈴木)0564-51-1602

## ◇生産物実習販売ごよみ◇

令和元年11月の生産物実習販売についてお知らせします。

- ・ 販売日：11月6日、13日、20日、27日  
(祝日を除く毎週水曜日です。)
- ・ 時間：午後3時から
- ・ 場所：農業大学校体育館
- ※なお、袋入り堆肥の販売は、10月9日から販売再開しています。
- ・ 問合せ先：農学科(山本)0564-51-1673

### 校内で豚コレラ防疫対策実施中

農大では、豚コレラ防疫対策を以下のとおり実施中です。来校される皆様の御理解と御協力をお願いします。

- 畜舎のある衛生管理区域への関係者以外の立入禁止
- 農大内の主要な通行ポイントに消毒用の消石灰を散布
- 主要な教育施設の各出入口付近全てに踏込消毒槽を設置(靴の消毒)
- 関係車両等の消毒の徹底  
(車両消毒槽、動力噴霧器)
- その他、諸防疫対策を実施

